審査員講評

田坂　清太（愛媛県俳句協会副会長）

スポーツ俳句にはスポーツをしてる人自身が作った俳句と俳句を作っている人がスポーツをみて作った俳句とがある。「秋天に足を突っ込む逆上がり」の句は後者である。前者ならば「秋天に足を突っ込み逆上がり」となる。さらに、ジュニアならば「秋空に足を突っ込み逆上がり」となるであろう。いずれにせよ「秋天に足を突っ込む」の感性がすばらしい。

スポーツをしている人自身の俳句が増えることを希望する。

松森　向陽子（愛媛県俳句協会副会長）

「青嵐ゴールキーパー横つ飛び」

この作品はサッカーの守護神ゴールキーパーの躍動の一瞬を捉えて作品化しましたが、季語の「青嵐」が情景を効果的に盛り上げ、自然と緊迫したゴールキーパーの動きとが一体化した力強い作品となりました。

俳句の革新を唱えた正岡子規が野球の名前を付けた話はあまりにも有名ですが、欧米のスポーツ導入の盛んな今日、その裾野は劇的な広がりを見せている現状からして、えひめスポーツ俳句大賞は意義深いものがある。

川本　征紀（愛媛県美術会評議員・二科会会員）

スポーツは日々の訓練の積み重ねが目的達成のエネルギーを発散する身体表現です。そのアスリートに対峙するカメラアイはデジタル化の進行と共に回を重ねる毎にシビアになってきました。

大賞作品は陸上競技の走り高跳びです。鍛えぬかれた競技者の宙に舞う姿はこうごうしさを感じる表現の秀作品です。金賞の藤原利忠氏の、「春の風　ボールふわりと　敵かわす」は　巧みなボールさばきがゲームの転換シーンを見事に表現しています。同じ賞の渡邉龍太朗氏の「汗みずく　むしゃぶり付くや　巨木の根」は、レスリングの必死の攻防が手のシーンで表現されています。